認知症とともに、認知症をこえて

～福岡県大牟田市の取組み～

大牟田市公式キャラクター「ジャー坊」
（presented by 株式会社レベルファイブ）
市制施行100周年を記念し、平成29年3月1日に大牟田市公式キャラクター「ジャー坊」が誕生しました。

令和元年12月4日
大牟田市保健福祉部福祉課
梅本政隆

これから皆さんと考えたいこと

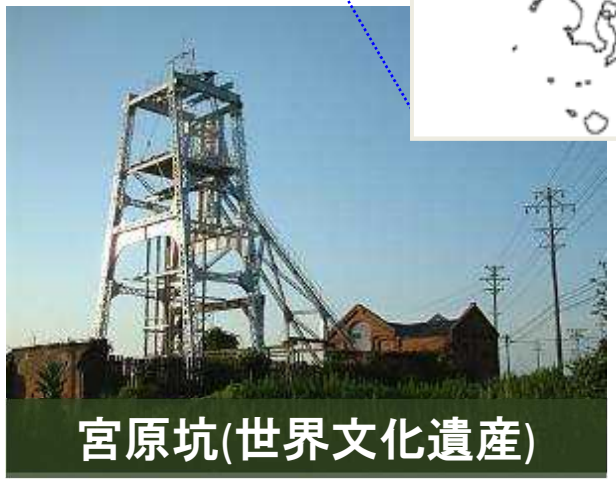
- あなたは、「認知症」になってもよいと思いますか？

- 「認知症」になってもよいと思える社会とは、どのような社会でしょうか

福岡県大牟田市の概況

～やさしさとエネルギーあふれるまち・おおむた～

福岡県大牟田市



宮原坑(世界文化遺産)

かつては炭鉱のまち
（平成9年三池炭鉱閉山）
今、大牟田は
人にやさしいまちへ

●大牟田市の人口

約210，000人（1960年） ⇒ **113，880人**（2019年10月）

●高齢者数 41，466人

高齢化率 **36．4％**（2019年10月）

後期高齢化率 **19．2％**

●要介護認定者数 7，475人

認定率 **17．8％**（2019年8月）

●世帯数 56，613戸（2019年10月）

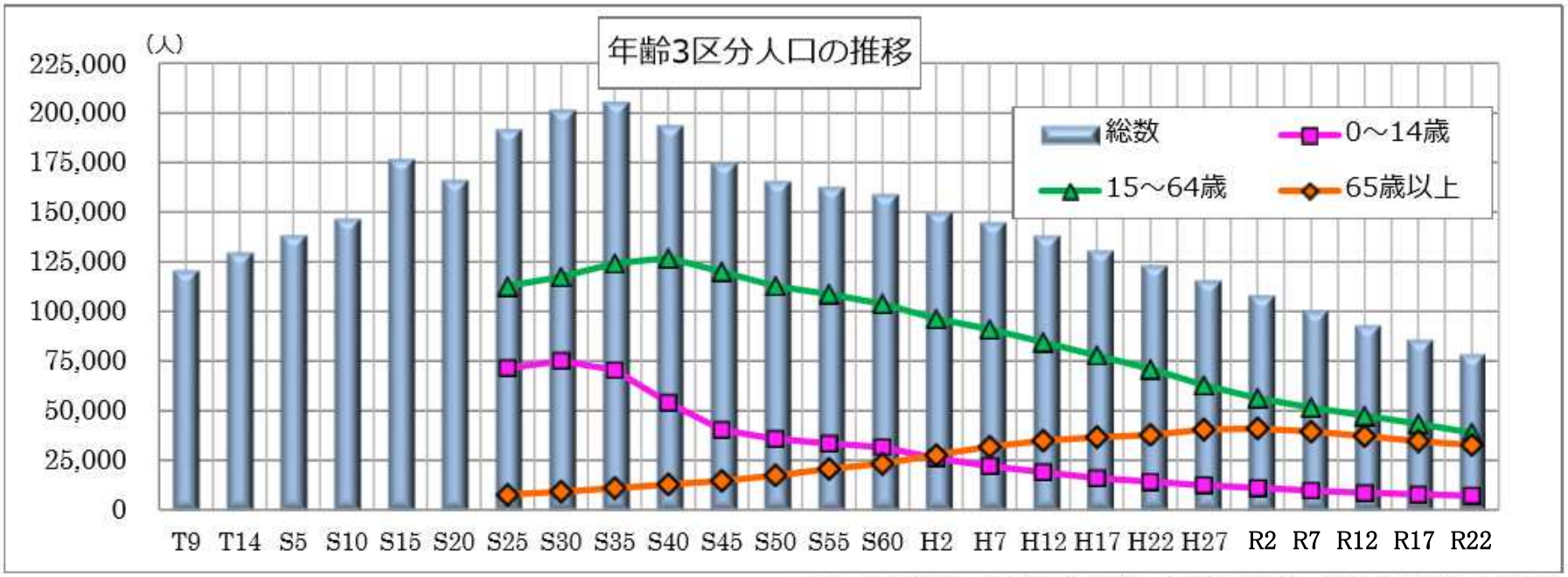
高齢者のいる世帯 30，518戸（53．9％）

高齢者単身世帯数 14，655戸（25．9％）

●地縁組織（まちづくり協議会）加入率 48．1％

※まちづくり協議会が設置された18小学校での世帯加入率（2017年3月末）

年齢3区分別人口の推移（大牟田市）

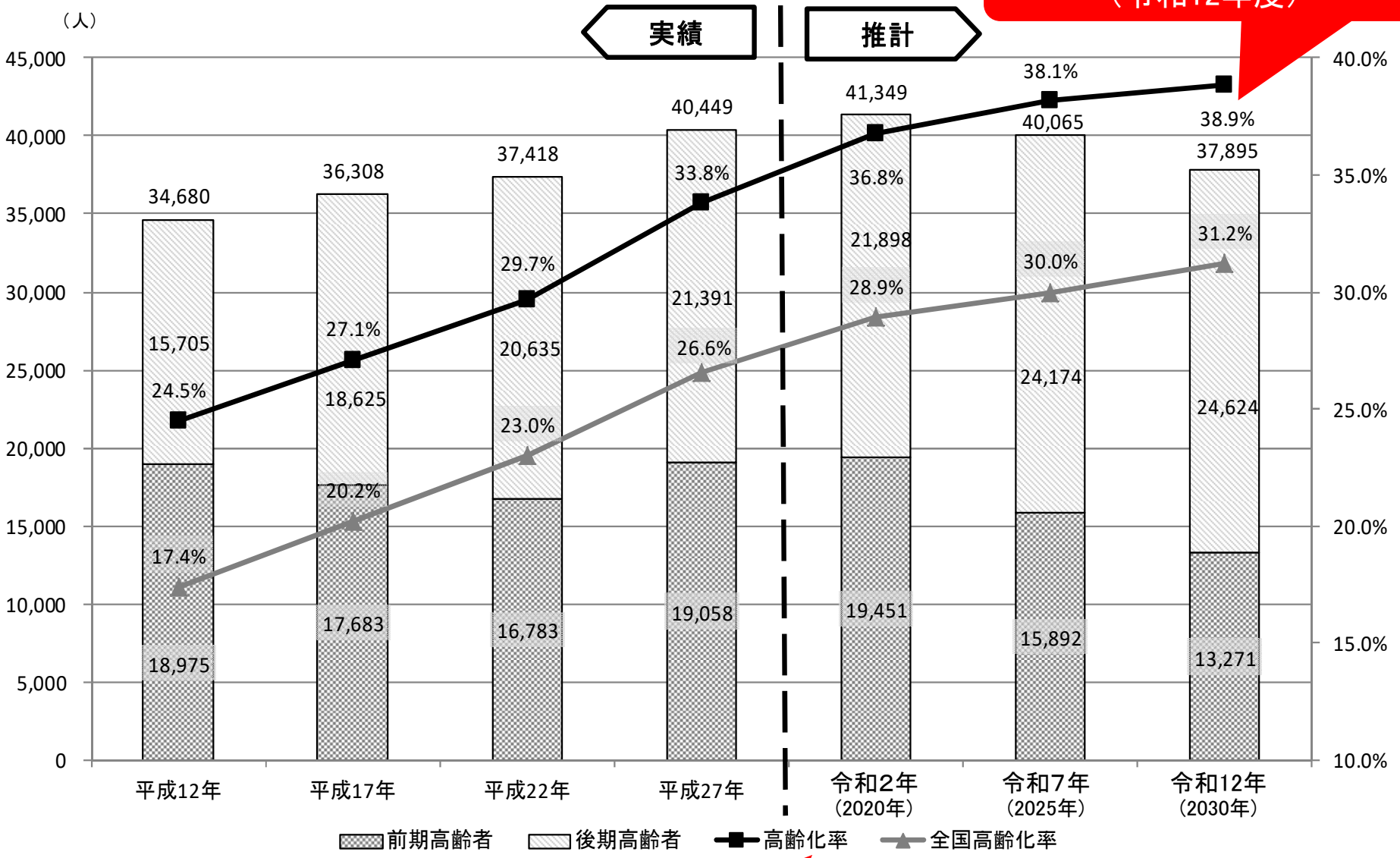


出典：国勢調査、国立社会保障人口問題研究所（H25.3 将来人口推計）

人口は今後も一貫して減少する中、生産年齢人口（15～64歳）の数が大きく減少することで、各産業における人材不足が懸念される。
全国平均の20年先の人口構成。

高齢化の推移（大牟田市）

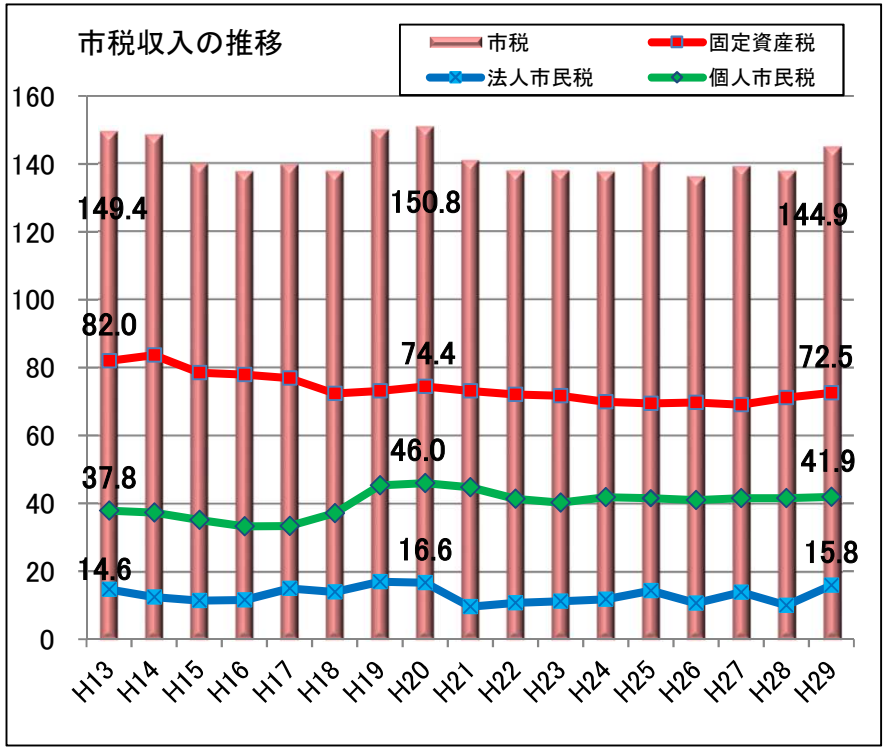
後期高齢者の割合が25%に
（令和12年度）

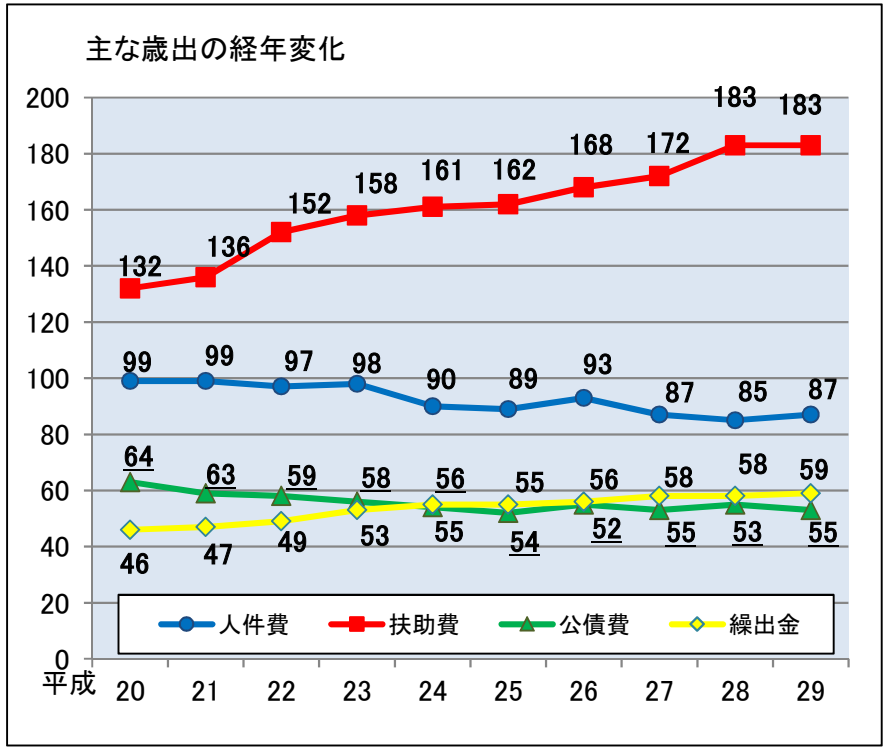


高齢者人口がピークに（令和元年度）

大牟田市：住民基本台帳（各年10月1日現在）
推計はコーホート要因法による
全　　国：国立社会保障・人口問題研究所

大牟田市の財政状況





人口減少とともに、市税収入は減少傾向

高齢化とともに、扶助費及び繰出金（介護保険、国民健康保険、後期高齢者医療保険など）の社会保障に関する費用が増加

認知症の人とともに暮らすまちづくりの原点は・・・

大牟田市認知症ライフサポート研究会（平成13年11月～）

大牟田市介護サービス事業者協議会の専門部会として認知症ライフサポート研究会（旧称：認知症ケア研究会）が発足。出発点は、**いつでも、どこにいても、誰といても自分らしく、幸福に暮して欲しいという願い**だった。だから、自分の施設だけ良くてもだめ！

・構成メンバー：市内の介護事業所に勤務する職員（専門職）9名の運営委員からスタート、コアメンバー・運営委員33名、会員約150名
・事務局　　：大牟田市保健福祉部福祉課

行政と介護サービス事業所の協働

H14年度より地域認知症ケアコミュニティ推進事業へ

地域全体で認知症の理解が深まり、認知症になっても、誰もが安心して暮らせるまちづくり

大牟田版　地域包括ケアシステム（小学校区を日常生活圏域として想定）

介護が必要になったら

介護

・介護サービス基盤の整備
・介護サービスの質の確保
・介護給付の適正化

入所・通所

訪問

在宅医療・介護連携

切れ目のない在宅医療と
介護の提供体制の構築

病気になったら

医療

入院・通院

訪問診療

・医療・介護連携の推進

安心して暮らすための
生活環境の整備

住まい

地域認知症ケアコミュニティ

・認知症の普及啓発
・見守り体制づくり
・人材育成
・予防、早期発見
・家族支援

訪問・見守り

・在宅支援
・介護家族の支援
・生活支援体制の
整備
・生活支援コーディ
ネーターの配置

・安心して暮らせる
住居等の整備
・交通手段の確保

いつまでも
元気に暮らすために

地域包括支援センター

・相談業務
・サービスのコーディネート
・地域ケア会議の開催

・健康づくり
・介護予防
・生きがいづくり
・社会参加
・生きがい就労

通所

予防

いつまでも
元気に暮らすために

生活支援

困った時の支えあい

自助・互助・共助

ケア現場や地域で、認知症の人の尊厳を支え、本人や家族を中心に地域づくりを推進していく人材

「認知症コーディネーター」養成研修

この16年間、常に実践課題にそって柔軟に修正、改善

履修期間2年間／計 約400時間（座学と実践学習、課題実習等）

到達目標

①認知症ケアや支援の実践現場において、権利擁護とパーソンセンタード・ケアを根底にしたより質の高いケアを牽引できる人材育成

②地域をフィールドに、認知症になっても誰もが安心して暮らせるまちづくりを目指して、地域ケアを推進できる人材育成

③大牟田市における地域認知症ケアコミュニティ推進事業を担える人材の育成

④大牟田市における認知症コーディネーター（地域支援推進員）として役割を担える人材の育成

➡ 住民に身近な場所・地域でパーソンセンタード・ケアを実践

大牟田市における認知症コーディネーター育成と配置

平成15年度

背景

1）認知症ケアの現場の情報、知識、意識や実践力の乏しさ、多職間、事業者間、行政や地域との連携の不足

2）単発の研修では知識や情報の蓄積はできても、意識や理念の醸成、実践力は高まらなかった

⇒平成14年度　年間6回コースの認知症ケア実践塾を実施

3）デンマークの認知症コーディネーターをヒントに養成研修開始

平成18年度

◎地域密着型サービス　（H30年度義務化終了）

⇒独自基準によりグループホーム及び小規模多機能型居宅介護に受講義務化

◎急性期病院に認知症ケアの理念と視点を！

⇒急性期病院への受講の推奨

◎地域包括支援センターには完全配置

現在（令和元年9月）

第1期生（平成16年度修了）～第15期生（平成30年度修了）

修了生145名

（うち認知症ライフサポート研究会運営委員25名）

第16期生（10名）・17期生（9名）受講中

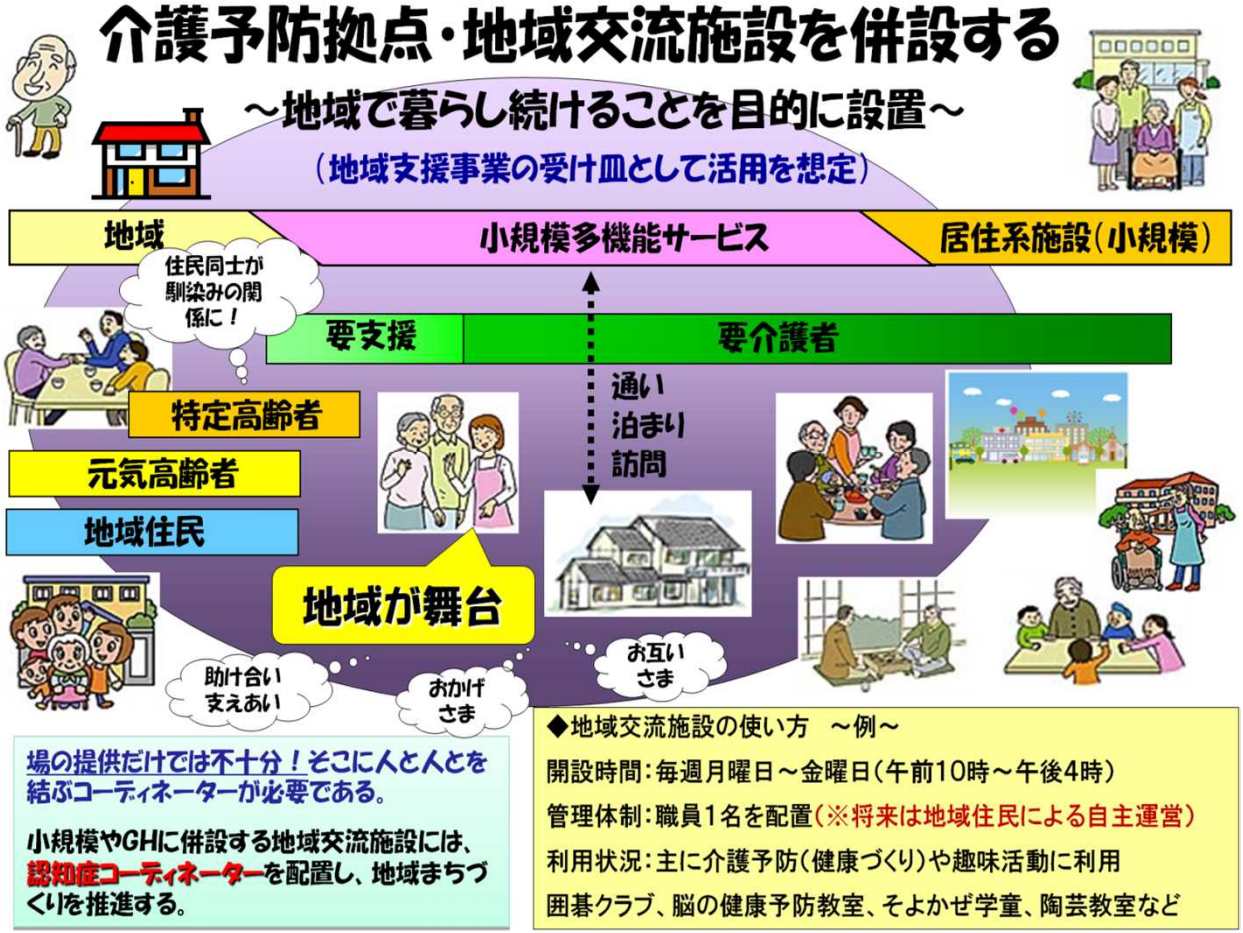
地域包括ケアの基盤整備

（小規模多機能型居宅介護施設と地域交流施設）

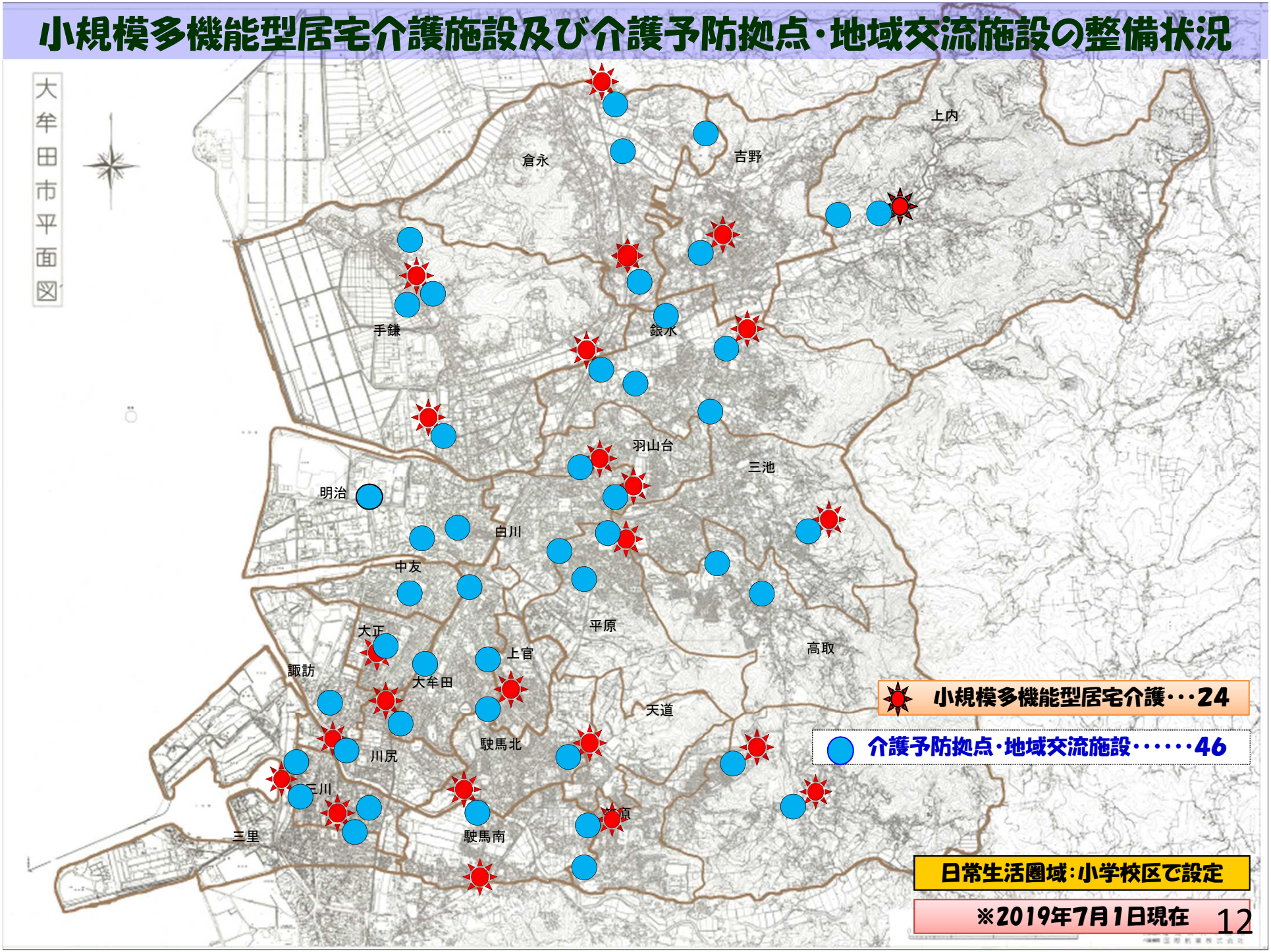
小規模多機能型居宅介護と地域交流施設

○　通いを中心に、訪問や泊まりのサービスを提供する小規模多機能型居宅介護に、介護予防拠点や地域交流施設の併設を義務付け、健康づくり、閉じこもり防止、世代間交流などの介護予防事業を行うとともに、地域の集まり場、茶のみ場を提供し、ボランティアも含めた地域住民同士の交流拠点となっている。

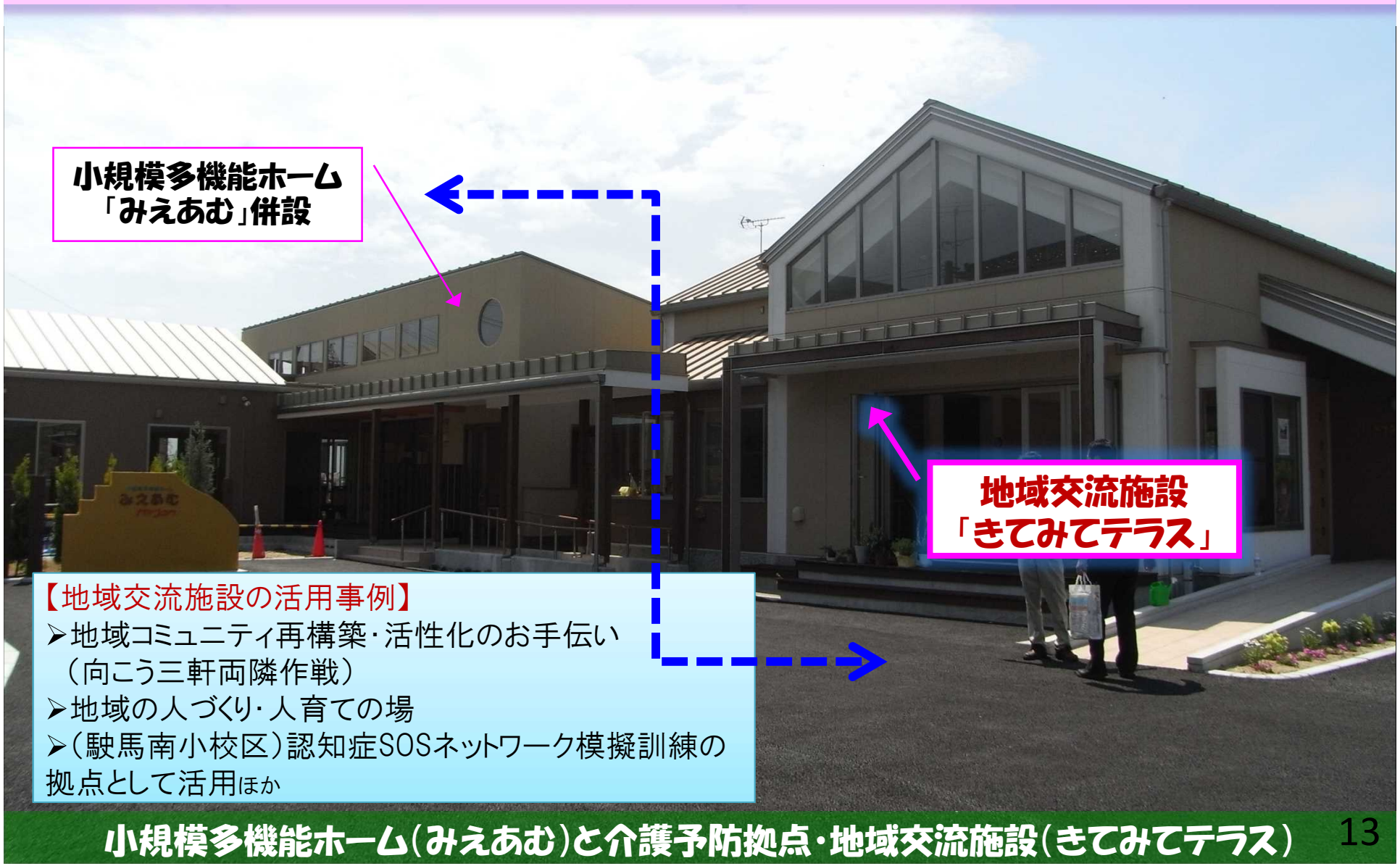
○　令和元年8月末現在、小規模多機能型居宅介護事業を行っている22事業所に設置。その他、介護事業所、医療機関等に併設し、計46箇所設置。



小規模多機能型居宅介護施設及び介護予防拠点・地域交流施設の整備状況



- 小規模多機能サービス拠点の整備にあたっては、日常生活圏域である小学校区に１事業所を目標に掲げ整備。また地域住民が自らサービスの担い手として参加し、コミュニティの再生や新たなサービス基盤の形成を図ることができるよう、介護予防及び地域交流の拠点として、地域交流施設の併設を義務化。（大牟田市独自の基準）



小規模多機能ホーム（みえあむ）と介護予防拠点・地域交流施設（きてみてテラス）

認知症の早期発見･早期支援
（認知症初期集中支援チームの機能と役割）

大牟田市地域認知症サポートチームの概要

メンバー構成

- 専門医、認知症サポート医（神経内科・精神科・老年内科等）：9名
- 認知症医療センター医師（神経内科）：2名
- 介護・看護職（認知症コーディネーター）：2名
- 認知症連携担当者（福祉課）：1名

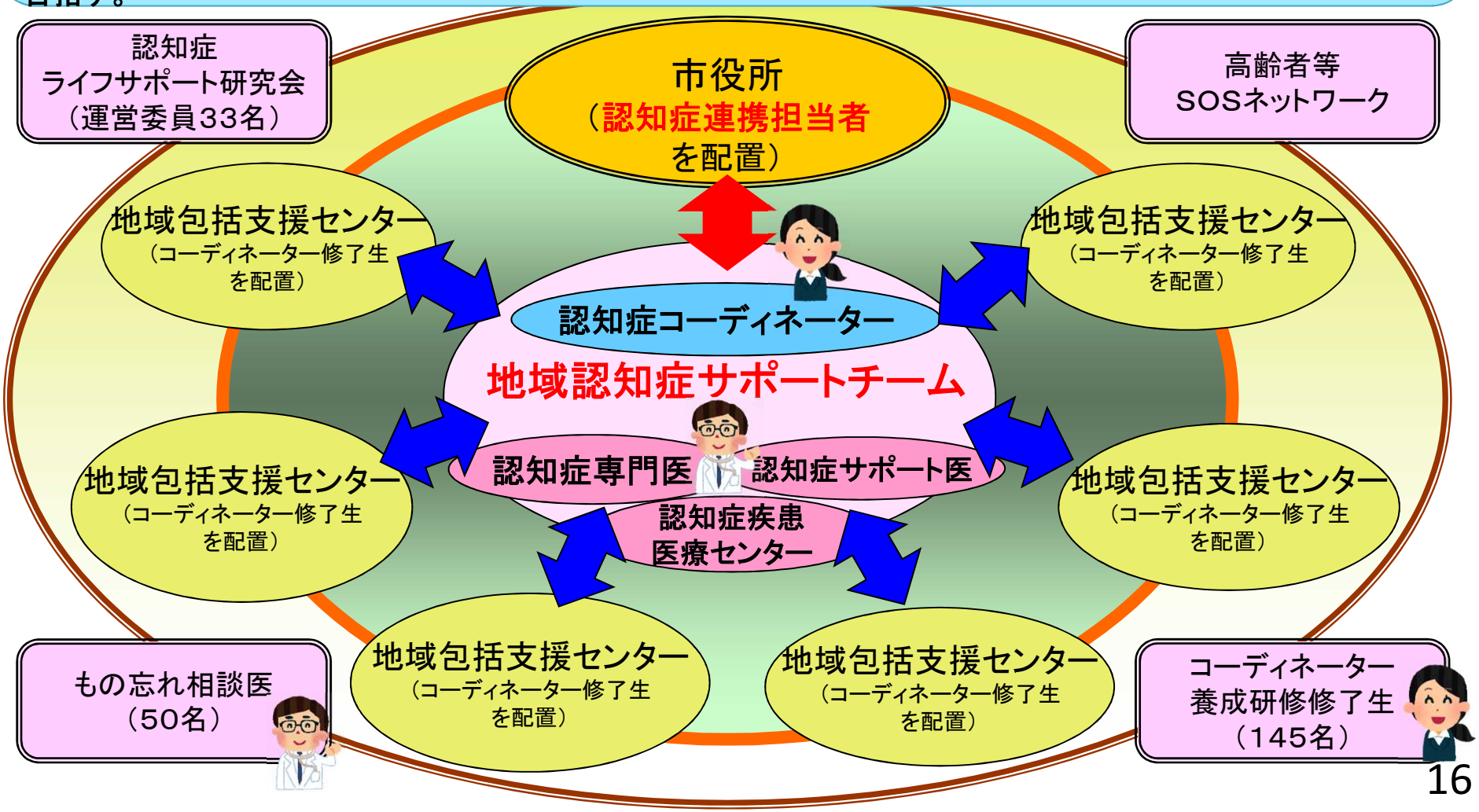
認知症地域支援推進員&初期集中支援チーム支援員

役割

- いわゆる困難事例へのスーパーバイズ
  FTD, 若年性, 高度BPSD, 受診拒否,自動車運転
- かかりつけ医との医療連携
- 認知症何でも相談窓口（週1回，於:大牟田市保健所）
- 介護サービス事業者へのアドバイス・指導，連携
- 事例検討会（月1回）
- もの忘れ予防・相談検診、予防教室の結果解析
- 予防教室・参加者のフォローアップ
- 若年認知症本人交流会，介護家族交流会のコーディネート
- 啓発活動　など

大牟田市の地域認知症サポート体制（チーム）

〇地域包括支援センター（6ヶ所）の支援機関として基幹的なサポートチームを設置。認知症コーディネーターと認知症専門医とが連携し、BPSD等の困難事例や特別なサポートが必要なケースを中心に、適切な助言や本人・家族への支援をコーディネートしていく仕組みを構想。
〇あわせて、市内地域密着型サービス事業所（小規模多機能型居宅介護・認知症高齢者グループホーム）や地域包括支援センターには、認知症コーディネーター養成研修修了生を配置することにより、共通の理念に基づくケアの実践を担う専門職同士のネットワークを通じ、事業所間、または事業所と地域包括支援センター間の更なる連携強化を目指す。



脳の健康チェック・もの忘れ相談会

健康チェックなど

1次スクリーニング：タッチパネル式
もの忘れ相談プログラム
（13点以下 or 生活上の支障）

2次スクリーニング：MMSE
（23点以下 or 抑うつ傾向：登録）

問診：相談医、
専門医（神経内科・精神科）

相談：認知症コーディネーター，
地域包括支援センター等

会　場

地域交流
施設
商業施設

保健所

年度	受診者数	2次スクリーニングにつながった割合
’06	145人	
’07	129人	約30%
’08	262人	
’09	198人	
’10	101人	約50%
’11	391人	
’12	294人	
’13	445人	約30%
’14	438人	
’15	353人	
’16	265人	
’17	328人	約40%
’18	161人	約15%

診断のための受診の促し
介護保険申請など
本人及び家族支援
かかりつけ医への報告

★すべての受診者（同意を得た人のみ）の
結果をかかりつけ医に報告

認知症予防教室「ほのぼの会」

- 2007年より市内6ヶ所の地域交流施設で週1回3か月間実施

「笑い」「会話」「楽しみ」「関わり」「仲間作り」
を大切にしたプログラム

＜メニュー＞エピソード記憶・計画思考・注意分割力・集中力・
想像力の向上　＊本人の希望や気持ちへの配慮

◎はつらつ日課メニュー　　1～3週⇒ウォーミングアップ
◎子供のころのおさらいメニュー　　4～6週⇒予防意識の向上
◎人生いろいろメニュー　　7～9週⇒自主性・主体性
◎振り返り日記タイムほか　　10～12週⇒継続性・支援マップ
13週～評価、支援調整

予防教室＋相談支援＋インフォーマルサービス（継続フォロー）

2011年より市の予防事業へ
2014年より通年型予防教室の実施
2018年度　事業終了

脳の健康チェック・もの忘れ相談会の課題と今後の方向性

課題

- 検診の受診者の減少（さらに、２次検査への参加率の低下）
- 予防レベルのうち予防教室参加率が低い
  ⇒予防教室の事業終了

背景

- ハイリスクアプローチの限界

今後の方向性

- 健康チェックに合わせて、認知機能のスクリーニングを実施
- 多様な参加の機会を確保（人とのつながりを重視）
  ⇒ ポピュレーションアプローチへ

大牟田市の認知症カフェの特徴

＊ご本人・家族・地域・サポーターと交流の場

＊「忘れても大丈夫！だよ」と言える関係

＊認知症や障害があっても大丈夫！

“仲間がいるから・・・”

＊プログラムは決めない！

参加者みんなで決める“認知症カフェ”

＊誰でも笑顔になる場所

＊認知症コーディネーター修了生がフォロー

＊生活支援コーディネーターと連携

大牟田市　認知症カフェ

詳細

＊情報は各事業所へお問い合わせください。(2019.1.11現在)

名称	電話番号	住所	開催日	時間	関係機関
であい喫茶築町	41-2676	築町3-19	(毎月) 第1木曜日	10:00～11:30	中央地区包括支援センター
カフェ白川	41-2676	上白川1-1 (上白川公民館)	(毎月) 第1金曜日	10:00～11:30	中央地区包括支援センター
もの忘れ喫茶	58-7265	橘1044-1	(毎月) 第2木曜日	14:00～15:30	国立病院機構大牟田病院
はっぴーこはま	41-2676	小浜町1丁目1番地8	(毎月) 第3火曜日	11:00～13:00	中央地区包括支援センター
てとてのカフェ	55-1212	小川町30番地1	(毎月) 第3水曜日	14:00～15:30	CLS菅原病院
みんなのカフェ リクシス	41-1121	岬1198	(毎月) 第3木曜日	13:30～15:00	みんなの家 リクシス
倉永カフェ笑	41-6025	倉永1307	(毎月) 第3木曜日	13:30～15:00	吉野地区包括支援センター
カフェ・ファーマシィ	32-8128	歴木1807-1152	(毎月) 第3日曜日	10:00～11:30	ファーマシィ・コガ
集いカフェ	41-6025	岩本新町2丁目4番地3	(毎月) 第4火曜日	10:00～12:00	吉野地区包括支援センター
カフェあじさい	59-3606	今山1184-23	(毎月) 第4火曜日	10:00～11:30	小規模多機能ホーム いまやまの家
ふれあいカフェ	52-3012	黄金町1丁目178番地	(毎月) 第4水曜日	13:30～15:00	医療法人信和会
カフェたくま	55-8721	田隈827-1	(毎月) 第4土曜日	11:00～13:30	医療法人東翔会

大牟田市認知症カフェの特徴

大牟田市の認知症カフェの基本姿勢は、下記の2点を十分に理解していることをお約束します。

①認知症カフェ10の特徴の要件を理解いただいているもの。
②大牟田市認知症コーディネーターまたは、認知症コーディネーター養成研修修了生の参加・協力を得ているもの。

認知症カフェの10の特徴

(公益社団法人認知症の人と家族の会「認知症カフェのあり方と運営に関する調査研究事業報告書」引用)

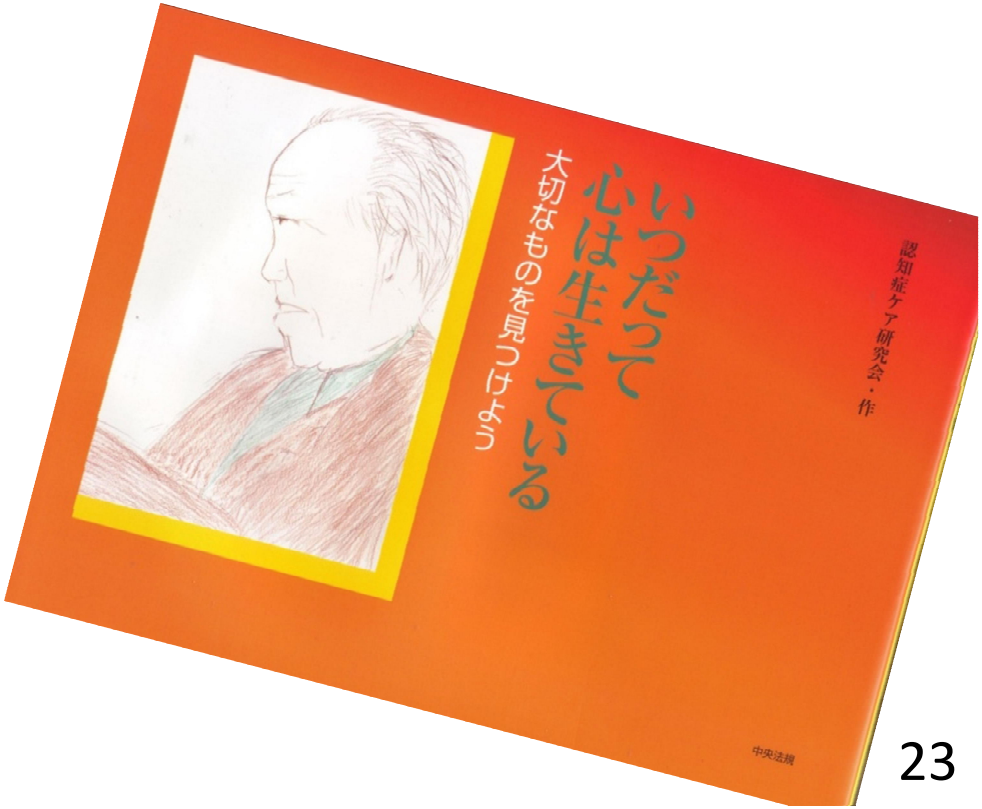
(1) 認知症の人とその家族が安心して過ごせる場。
(2) 認知症の人とその家族がいつでも気軽に相談できる場。
(3) 認知症の人と家族が自分たちの想いを吐き出せる場。
(4) 本人と家族の暮らしのリズム、関係性を崩さずに利用できる場。
(5) 認知症の人と家族の思いや希望が社会に発信される場。
(6) 一般市民が認知症の人やその家族と出会う場。
(7) 一般の地域住民が認知症のことや認知症ケアについて知る場。
(8) 専門職が本人や家族と平面で出会い、本人家族の別の側面を発見する場。
(9) 運営スタッフとして、必要とされていること、やりがいを感じる場。
(10) 地域住民にとって「自分が認知症になった時」に安心して利用できる場を知り、相互扶助の輪を形成できる場。

認知症の啓発
（絵本教室）

いつだって心は生きている ～大切なものを見つけよう～

子どもたちと学ぶ認知症（絵本教室）

子どものときから認知症を学び、
触れる機会をつくる一つの方法として、認知症の啓発絵本を作成することになりました・・・



平成１５年度
地域の２４人の子どもたちと作成

３つの物語を認知症ケア研究会の運営委員が作り、物語にあう絵を子どもたちが描きました

どんな絵本？

～第１章～

ものがたり

（全３話）

～第２章～

解説

～第３章～

絵本のねらい

活用方法

どんな物語？

～第１話～

こわい夢

認知症になっても家族を想う気持ち

～第２話～

くしゃくしゃ笑顔と

や・さ・し顔

「ええとこ探し」

～第３話～

ぼくのおじいさん

は冒険家

「徘徊」を「冒険」と捉えるユニークな視点

認知症になったおじいさん・おばあさんを温かく見守るボク（主人公）や家族、地域が描かれています

絵本教室の目的（ねらい）

1．障害があっても認知症であっても同じ価値ある尊い存在であるという人間観を育む

2．ともに助け合い支え合う地域社会の大切さを学ぶ（自分が支える存在でもあり、支えられる存在ということに気づく）

従事者の姿勢

- **従事者自身が、どのような人にでも「可能性」があり、価値のある存在だという人間観、支援対象者を「客体」としてではなく、「主体」として捉える支援観をもっていることが重要。**

絵本を使った総合学習の流れ

★依頼先　　：市福祉課へ

★事前打ち合わせ：1ヶ月前

＊学校側のねらい、要望
＊認知症ケア研究会からの提案
＊子どもたちの様子、注意事項

★アンケート調査（前）1週間前

＊高齢者のイメージや認知症についての意識

★読本と感想文4～5日前

＊小学生～第2話、絵日記風
＊中学生～第3話
テーマ「絵本を読んで感じた大切なもの」

★当日

＊絵本読み聞かせ＆PPT映像
＊認知症の理解のためのイメージアップ
＊グループワーク
テーマ「認知症の人ってどんな人」「僕たちにできることって？」「大切なものって何だろう」
＊発表とコメント

★アンケート調査（後）1週間後

★保護者への情報発信

＊絵本教室への参加の呼びかけ
＊絵本教室の様子を通信などで

グループワークのテーマ

- 認知症になった人はどんな気持ち？
  →自分が認知症になったら、どんな気持ちになるだろう…

  ※「認知症」という病気だけではなく、人に目を向けることが重要

- みんなのおじいちゃん、おばあちゃんが認知症になったら、自分たちには何ができる？
  →自分が困っているとき、何をしてもらったら嬉しいだろう…

対応の留意点

- どのような意見でも受け止める。マイナス意見の場合は、気づきを評価する
  例)「(認知症になったら)死んだほうがマシ」
  ⇒「そうかぁ、認知症のご本人はそれくらい辛いかもしれないね」
- 意見が出にくい場合は、クローズドクエスチョンを活用する
  ×「何でもいいから言ってごらん」
  ○「絵本の中のおじいさんは、道に迷った時、どんな気持ちだったろう？」

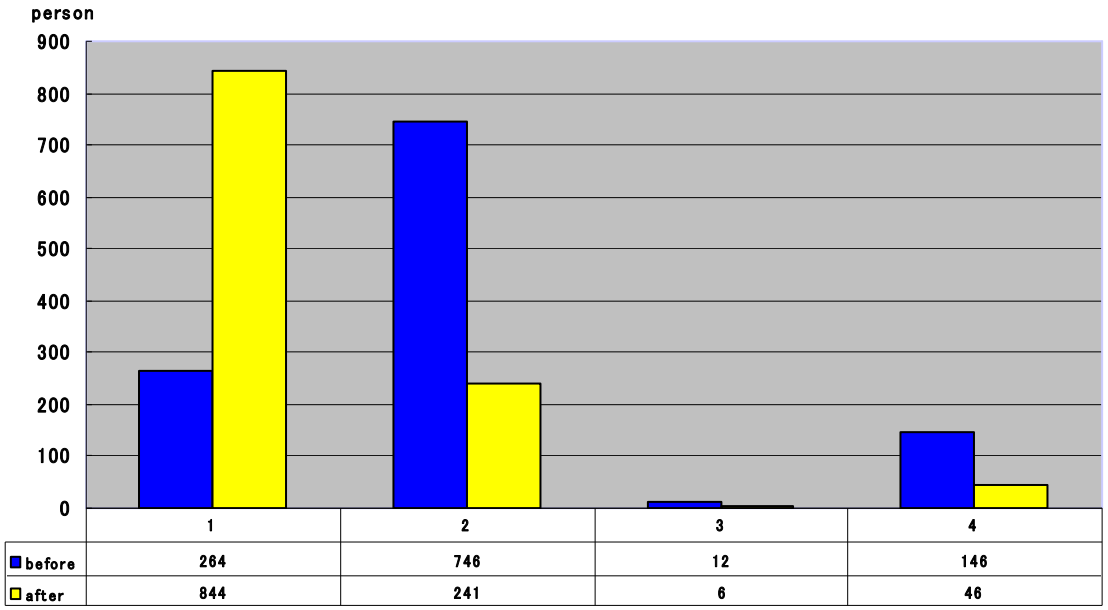
子どもたちの声より…（心）

- 認知症になるのはかわいそう…でも、もしおばあちゃんがなっても、おばあちゃんのやさしい心は変わらない、だから私がやさしくしてあげる
- 家族も忘れてしまうなんて悲しい、思い出を忘れてしまうなんて悲しい…だからぼくが新しい思い出をつくってあげるんだ
- 認知症の人も同じ人間なのに差別を受けるなんておかしい…僕たちと同じように認知症になってもやりたいことをやってほしい
- 認知症は不便だけど、不幸ではない
- 僕たちにできることを、できることからしていきたい…あきらめずに一緒に闘う
- 心も体もそばにいてあげたい

アンケート結果

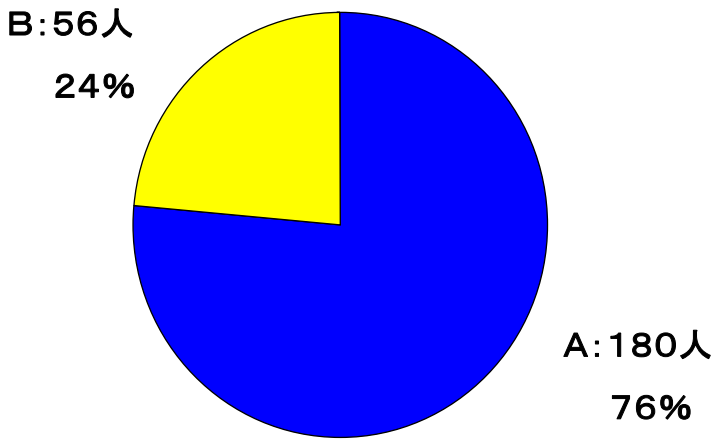
Q. あなたの家族や親戚、または近所の人が「認知症」になったら、自分にできることがあると思いますか？

A：あると思う
B：あると思うが、何をしていいかわからない
C：自分たちにできることは、ないと思う
D：わからない



	1	2	3	4
before	264	746	12	146
after	844	241	6	46

Q. 絵本教室の後、あなたなりに取り組みをしましたか？



A：した
B：していない

絵本教室の実施状況

	小学校	中学校	計
16年度	2	2	4
17年度	3	3	6
18年度	4	3	7
19年度	6	7	13
20年度	8	5	13
21年度	10	7	17
22年度	13	6	19
23年度	9	6	15
24年度	11	10	21
25年度	10	7	17
26年度	10	5	15
27年度	10	6	16
28年度	10	7	17
29年度	7(1)	4(2)	11(3)
30年度	9(1)	6(1)	15(2)

※小中学校の合併により、学校数は減少。令和元年度は小学校19校、中学校8校。
※(　)内は、絵本を活用した認知症学習会等の開催回数(絵本教室を実施した学校数は除く)

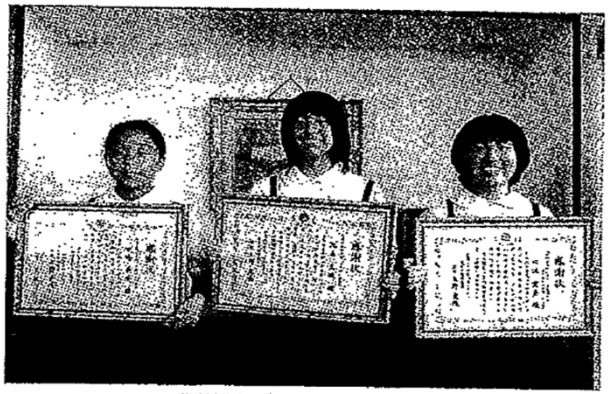
中学生3人へ感謝状

大牟田署

声掛け、熱中症予防

―炎天下に高齢女性保護

大牟田警察署（上野恵造署長）は二十三日、道に迷っていた高齢の女性（76）を適切に保護したとして、大牟田市米生中学校の女子生徒三人に感謝状を贈った。炎天下、声掛けから熱中症予防まで、三人が行ったこまやかな心遣いに対し上野署長は、「大牟田はお年寄りの多い地域。皆さんの活動は助かります」とたたえた。



感謝状を受け取った生徒３人

三人はいずれも同校一年の中嶋希世さん（13）、池永志織さん（12）、川津愛奈さん（13）。今月三日午後一時半ごろ、遊びに出掛ける途中、横断歩道を渡る女性に気付いた。中嶋さんは昨年、徘徊（はいかい）模擬訓練に参加したことがあり、女性の様子が気になった。「大丈夫ですか」と声を掛けると、「ここはどこですか。延命公園まで行けば自宅が分かります」と女性は返答。三人で同公園に同行することにしたという。

福岡管区気象台によると、この日の最高気温は三六度。三人は熱中症を心配し、自動販売機でペットボトルの茶を女性に飲んでもらった。同公園に到着しても自宅は分からなかった。そこで同署に行くことにしたが、その際には認知症コーディネーターの中嶋さんの母親（42）に指示を仰いだ。『警察に行く』というと警戒されるから、『警察に道を尋ねに行きましょう』と言いなさい」というアドバイスに従い、女性を安心させた。女性は初期の認知症だというが、名前と住所を覚えていたため、同署員が自宅に送り届けた。感謝状を受け取った中嶋さんは「訓練が役に立った」、池永さんが「びっくりした」、川津さんは「うれしかった」と笑顔を見せた。

今年一月から七月末までで、認知症を原因に同署の関わった六十五歳以上の高齢者の保護事案は百二件。前年より三十八件増えている。

（江頭　裕一）

倉永小児童がお手柄

認知症の女性を自宅へ

大牟田

認知症の女性を助けた児童たち

大牟田市倉永小学校（永尾一幸校長）の5年生女子7人が2日、下校中に道に迷った認知症の高齢女性に声を掛け、自宅へ送り届けた。3日には女性の夫が同校を訪問し「助けがなかったら、命を落とすなど大変なことになったかもしれません。ありがとうございました」と感謝。児童は「命を救えて良かった」と胸をなでおろしていた。

円ゆうなさん、武宮未侑さん、安部初野さん、松永祐唯さん、岩村愛菜さんが同校そばで国道208号の車道の端を歩いていた女性を発見。「危ないですよ」と言葉を掛けると、女性は「ありがとう」と歩道に上がったが、様子を見た志気遙奈さんと園田志帆さんも加わって近くの店の男性に知らせ、男性と共に無事に自宅まで連れて帰ることができた。女性は買い物へ行った帰りに道が分からなくなっていたという。

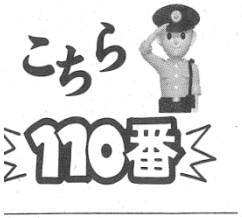
同校5年生は福祉教育の一環で、校区社会福祉協議会や校区内の民生委員児童委員と連携して学習。ひとり暮らしの高齢者、認知症の高齢者が多いことなどを学んできた。

児童たちは「声を掛けてなかったら事故に遭われたかもしれないので、助けられて良かったと思います」「福祉の勉強が役に立ちました」などと感想。曽祖母がいる児童から「もし認知症になったら世話をしたいです」との声も聞かれた。

永尾校長は「みんな普段から素直で、あいさつもよくしています。学習とともにそんなところも声掛けにつながったと思います」と話していた。

（高本　明）

こちら



こちら110番

絵本教室の成果と課題

◆相手の気持ちを想像し、どうしたら嬉しいのか、自分のこととして考えることを学ぶことができる。
◆子どもたちが会話を通して自己肯定感や自信をもつ。おじいちゃんやおばあちゃんも、そして自分も大切な存在と気付く。（子どもたちが癒される）
◆頭で考えたことを、行動に移すことを学ぶことができる。

課題　①いかに実施校を増やすか
②協力人員の確保・質の維持

対応　①社会福祉協議会との連携により実施校の増加
教育委員会との連携（ユネスコスクール）
②地域包括支援センターの役割の明確化

認知症になっても、
安心して外出できるまちづくり
（ほっと安心ネットワークと模擬訓練）

模擬訓練実施の経緯

～きっかけは1小学校区の取組みから～

平成16年10月　駿馬南校区で初の模擬訓練を実施

「自分たちの町からは絶対に孤独死をださない！」と一人暮らし高齢者の見守り、声かけ運動などの地域活動を行っていた駿馬南校区で、行方不明による死亡事故が発生。

どげんかせんといかん！

地域住民の意識の高まり

「SOSネットワーク模擬訓練」を開催。それまであまり機能していなかった「大牟田地区高齢者等SOSネットワーク」に活用について検討。この訓練をきっかけに構成団体による情報伝達、見守りが始まった。

平成17、18年度　駿馬南校区で引き続き模擬訓練を実施

平成19年度　市内7校区で模擬訓練を実施

認知症の啓発を強化、模擬訓練に向け小地域で認知症サポーター養成講座を開催

町内公民館長、民生委員･児童委員、福祉委員、商店、地域交流施設等で構成する校区ごとのネットワーク構築が始まる。

平成20年度　市内9校区で模擬訓練を実施

平成21年度　市内18校区で模擬訓練を実施　「愛情ねっと」にて行方不明者情報配信開始

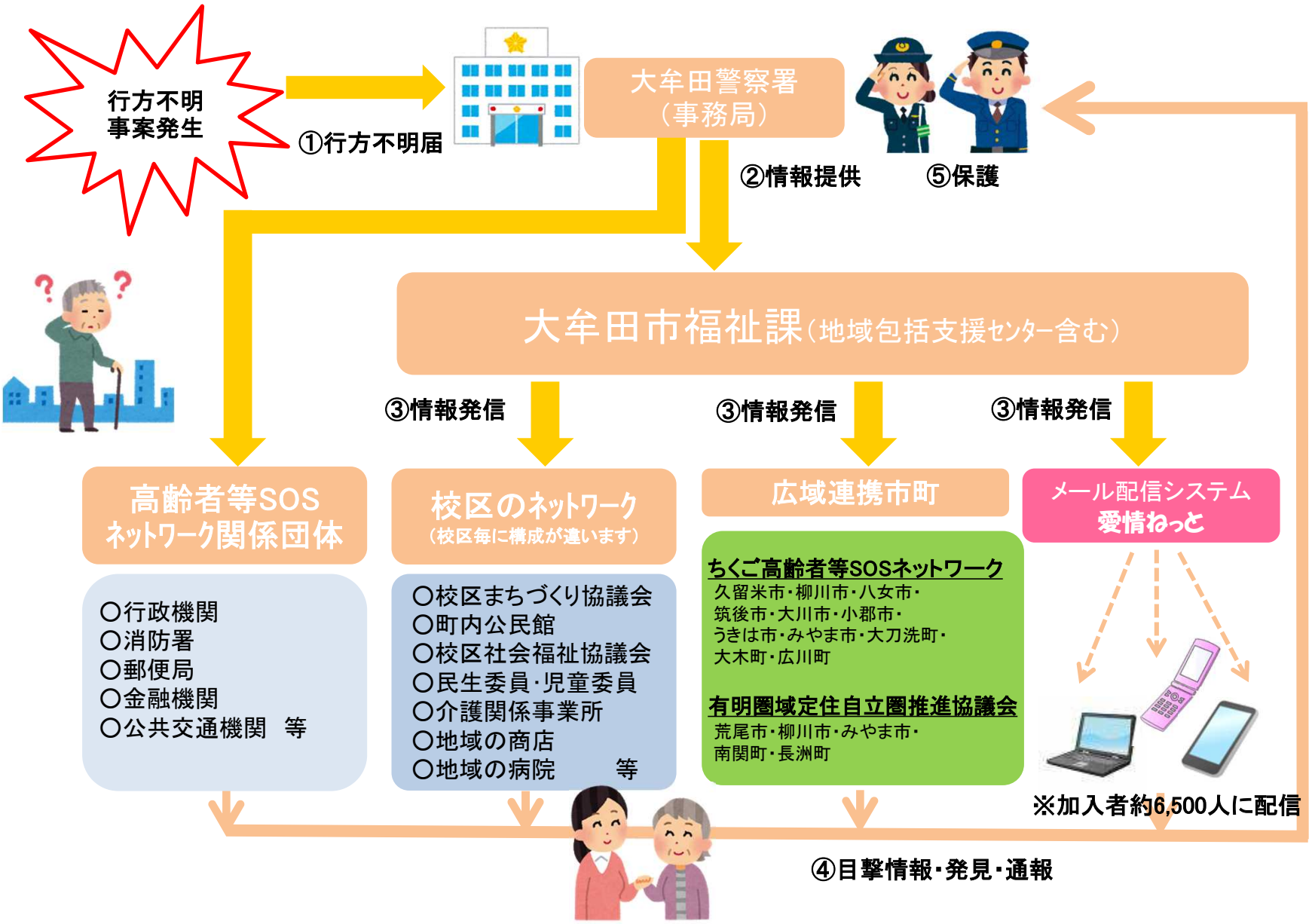
平成22年度　この年までに全22校区で模擬訓練を実施

平成27年度　「徘徊SOSネットワーク模擬訓練」から

「認知症SOSネットワーク模擬訓練」に名称変更

令和元年度　「ほっとあんしんネットワーク模擬訓練」に名称変更

ほっと安心ネットワークの全体構成



様式2号-1

大牟田市ほっと・安心ネットワーク

大牟田地区高齢者等SOSネットワーク　情報提供シート

（ 27年 | 9月 | 4日 | 20時 | 50分 発信）　　写　真

〔所在不明者情報〕

ふりがな：	おおのだ　いちろう								
氏名：	大牟田　一郎	年齢：	68	歳	性別：	男			
住所：	大牟田市萩尾町						(町丁名まで)		
所在不明発覚時間：	27	年	9	月	4	日	16	時	0 分　頃
警察署へ届出時間：	27	年	9	月	4	日	19	時	15 分　頃

服装	上	紺　色	Tシャツ
	下	黒色　色	ジャージ
	履物	白　色	ズック（紺色の線入り）
	持ち物	灰色の帽子　杖	
	その他	眼鏡をかけている	

身体的特徴	身　長	160　cm位	体　重	48　kg位	
	体　格	やせ型			
	髪　型	白髪混じりの短髪			
	足腰の状態	しっかりしている			
	その他				

認知症の有無：	有（軽度）	名前が	言える	連絡先が	言えない
行方不明歴の有無：	無	以前保護された場所			

不明前の様子

特に変わった様子はなかった。

その他（本人がよく通っていた場所や実家等）

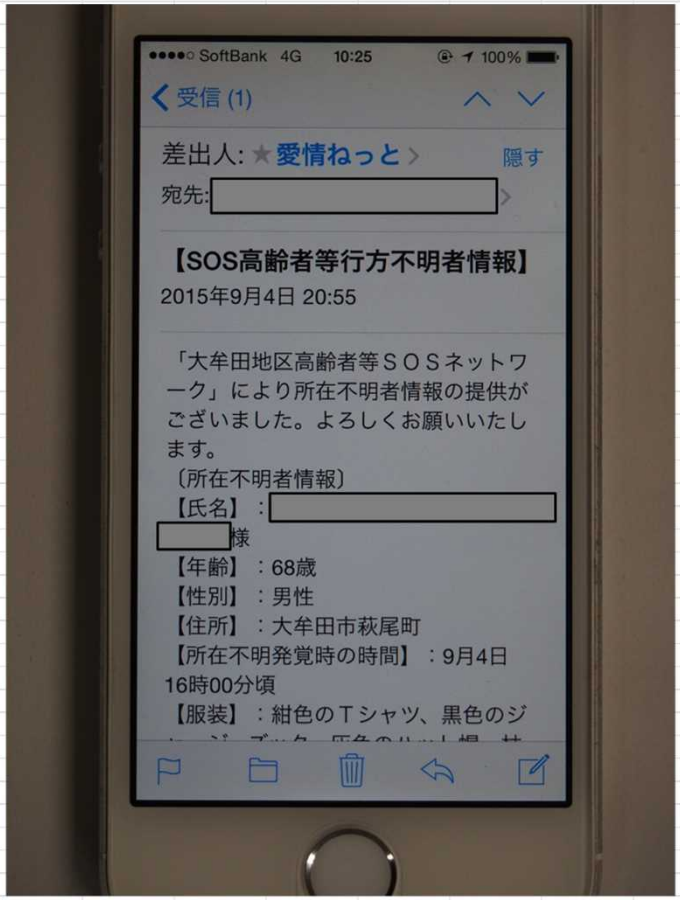
○○クリニック（白川12-34）

発見した際の連絡先

大牟田警察署　43-0110（大牟田市不知火町3丁目8番地）

※発見されましたら、この情報提供シートは、適宜、速やかに破棄するなど適切に処理して下さい。

愛情ねっと
（携帯メールの受信画面）



ほっとあんしんネットワーク模擬訓練当日の流れ

１．警察署より情報発信
行方不明者の家族から大牟田警察署生活安全課に捜索願が出されたと想定し、SOSネットワークを通じ関係団体に行方不明情報を発信。

２．市役所より情報発信
警察署からの連絡を受け、福祉課から介護事業所、医療機関へ情報を発信。愛情ねっと登録者へメールでの情報配信。

３．校区拠点より情報伝達
校区ごとに作成した情報伝達網を活用し、情報伝達を行う。できるだけ「早く･正確に･末端まで」が目標。

４．各校区にて捜索･声かけ訓練
各校区の体制に応じ、捜索および声かけ訓練を行う。校区によって、捜索に重点を置いたり、声かけ訓練に重点を置いたり、スタイルはさまざま。

５．訓練本部報告会／校区反省会
模擬訓練が終わったあと、本部では訓練結果の速報を行う。各校区でも反省会を行い、「情報伝達は速く･正確にできたか」「声かけは上手にできたか」など、次年度に向けて検証を行う。

認知症SOSネットワーク模擬訓練の様子（2018年）

外出役の発見、保護

中学生の声かけ

目線を合わせて声かけ

模擬訓練実施結果（最近5年間）

	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
訓練参加者合計（人）	3,083	3,127	2,945	2,603	2,617
外出役数（人）	107	95	82	102	87
外出役への声かけ（人）	1,506	1,627	1,087	1,676	1,551
模擬訓練参加校区数	21	21	19	20	19
サポーター養成講座開催数	38	43	38	24	36
受講者数（人）	1,102	1,322	896	873	1,080
他都市からの視察（人）	177	173	141	94	93

※小学校再編により、30年度から市内19校区になりました

大牟田地区高齢者等ＳＯＳネットワーク利用件数

	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
高齢者の保護数	121	169	138	141	139	121	155	146
高齢行方不明者の届出数	24	24	24	22	27	35	20	25
SOSネットワーク利用数	20	24	23	14	18	11	9	14

大牟田警察署調べ

※大牟田市内における認知症高齢者の利用数に限る。障害者や小中学生、広域ネットワーク関係分は含まない。

※2014年以降の高齢行方不明者の届出数とSOSネットワーク利用数の差は、ネットワークに情報を流す前に発見に至ったもの。

警察から市に通報を受けてから愛情ネットの発信までどうしても１時間程度かかる。

■16年目の模擬訓練を迎えるにあたって私たちが向き合っていること

事例①

- 毎年、模擬訓練に中心的な立場で活動されていた住民が認知症に。
  それ知った周りの住民は積極的に気遣いを行う。
  本人はそれが辛く、外出をしなくなった。

事例②

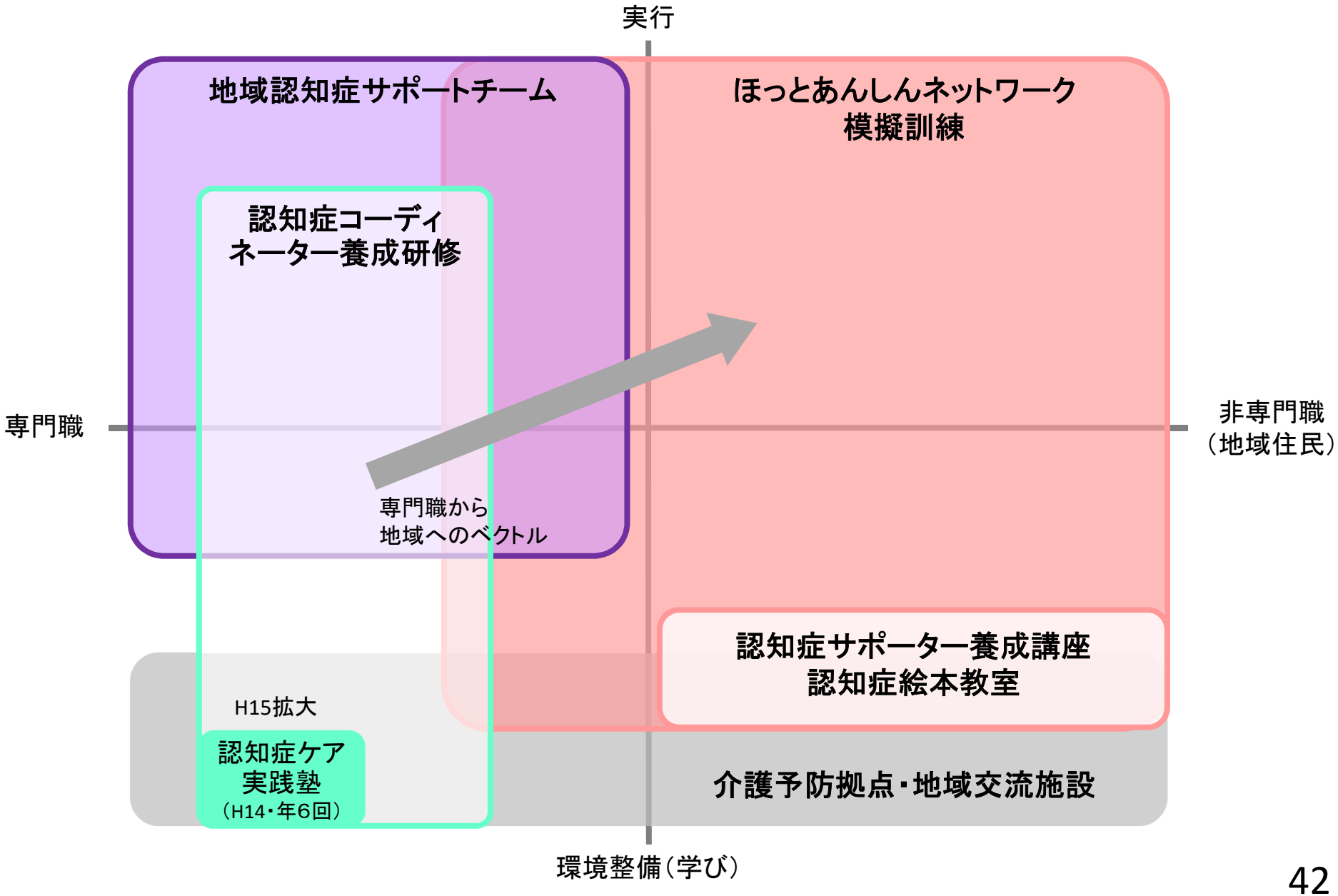
- 老人会や公民館の行事にも必ず参加していた女性が認知症になり、
  関りを拒否しはじめた。
  住民は遠目に見ていたが、ある日、本人が行方不明に。
  その後、およそ1か月後に自宅にて遺体で発見された。

事例③

- 80代の女性が行方不明に。
  愛情ねっとで情報が流れ、およそ2時間後に無事発見。
  警察署に迎えに来た夫は、「お前は世間に迷惑をかけた！恥ずかしい！」
  と本人の頬を叩いた。その数日後に本人は施設入所。

何のための、啓発・ネットワークなのか

認知症ケアコミュニティ推進事業の関係性



新たな社会参加の模索（共生に向けて）

■本人のやりたいことや会いたい人と一緒に過ごす時間を応援する

高齢中心　　全（多）世代

●事例①　畑を場とした全（多世代）での社会参加・居場所づくり

要介護1の一人暮らしの男性。デイサービスを利用しているが、利用時間以外の時間に家から居なくなることがあり心配だと、民生委員・児童委員より地域包括支援センターに相談がある。本人と行動を共にしていると、所有している畑に行っていたことが分かった。
「畑をしたいけど、一人では不安」と話されたため、民生委員・児童委員、デイサービスの職員等も交えて話し合いを行い、皆で支えていこうということで畑を再開する。

■本人のやりたいことや会いたい人と一緒に過ごす時間を応援する

部署横断的な動き

●事例②　当事者とつくるやさしいまちづくりの取組み

認知症の診断を受けた直後の当事者や家族から、「当事者と会いたい」という声を聞き、当事者同士が語り合える「場」として、ファミリーレストランで定期的に集まっている。
さらに、「情報はほしいがインターネットが使えない。本屋には本が少ない」「図書館では（ほしい本を）見つけることができなかった」という声をもとに、関係機関が集まり意見交換を実施。図書館で本を探しても認知症に関する本は、医学や福祉・介護のコーナーなど点在していたため、今年５月末には認知症の本を並べたコーナーを設置。
図書館以外にも、対象を交通機関や金融機関にも広げて意見交換を実施している。

■産業課題と福祉課題の統合的解決

部署横断的な動き

●事例③　企業の人手不足問題と地域とのつながりづくりを組み合わせる取組み

宅配におけるラストワンマイルの配達を、小規模多機能型居宅介護施設の利用者が実施。
可能な限り手渡しで配達することで、利用者と地域住民とのつながりづくりになり、安心して外出できる環境をつくっている。市内の介護事業所に少しずつ広がっている（3箇所）。

■社会資源や仕組みの創出

課題

- 地域の生活課題について、様々な分野の地域の人（福祉関係者、産業関係者、行政）で話し合う「地域共生フォーラム」を開催。**地域では、様々な社会資源が萌芽的に存在し、何かしたいと考えている人がたくさんいる**ことが判明。

- 例えば、介護事業所では利用者の「働きたい」という意欲にどのように応えるのかという課題があり、一方企業には労働力不足という課題があった。

実施内容

- 地域共生フォーラムに参加した企業と、介護サービス事業者をつなぎ、利用者（高齢者）の「働きたい」を応援。
  デイサービス×カーディーラー：洗車作業
  デイサービス×花屋：フラワーアレンジメント等
  小規模多機能型居宅介護×宅配便：メール便の配達業務
  小規模多機能型居宅介護×農業：草むしり・枝拾い　など

- 上記の取組をきっかけに、高齢者だけでなく、障害者、子ども、生活困窮者を支援する関係機関が集まり、「就労支援プラットフォーム」を構築。分野を統合した就労支援について、検討を継続。

効果

- 実際に就労につながった高齢者は、作業の対価として得た報酬で配偶者が好きな食べ物をプレゼントするなど、**生きがいの増加**につながっている。また、**リハビリに対する意欲が向上し、ADLが大きく改善**。（リハビリプログラムの影響もあることに留意）

- 介護サービス事業所にとっては、利用者・家族とのコミュニケーション向上、職員のモチベーション向上などの効果がみられている。

共に生きるとは？

- 「困っている人がいるから支える」ではなく、
  「困っている人の思いを理解する」でもない。
  それでは、「支援する側・される側」の発想から
  抜け出すことはできない。

- 誰にでも不便なことがあり、誰にでもやれることがある。

藤里町社会福祉協議会　菊池まゆみ会長の言葉より

当事者の持つ力の可能性

「ご本人のおかげで、バラバラだった地域がまたつながった」

ご近所ケア会議に参加した民生委員・児童委員の言葉より

- 地域ケア会議に本人や家族、近隣住民が参加し、本人の思いを知ることを通して、その人も含めた地域の人々が再びつながる可能性

出所）大牟田SIBコンソーシアム（NPO法人ドネルモ）「保健福祉分野における民間活力を活用した社会的事業の開発・普及のための環境整備事業（地域課題型事業）事業報告書」2019年３月